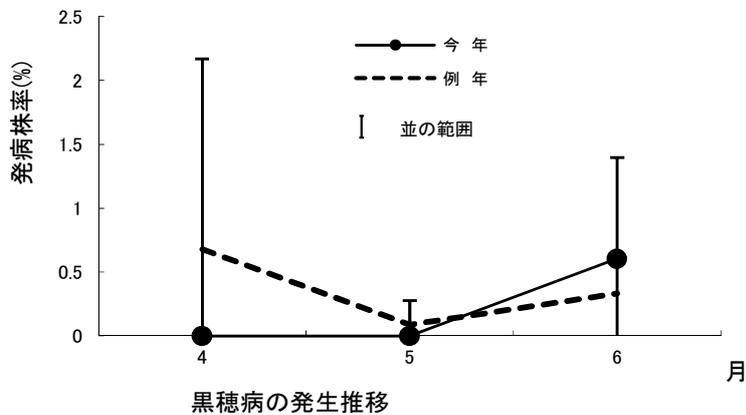


作物	さとうきび	地域	沖縄群島
病害虫名	① 黒穂病		
6月の発生量（現況）	並		
7月の増減傾向	↗		
増減傾向の根拠	6月～7月が発生ピークであることから、6月より発生量は増加すると考えられる。		

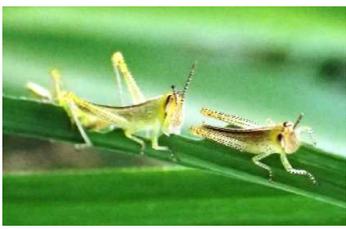
発生量の根拠（調査結果）



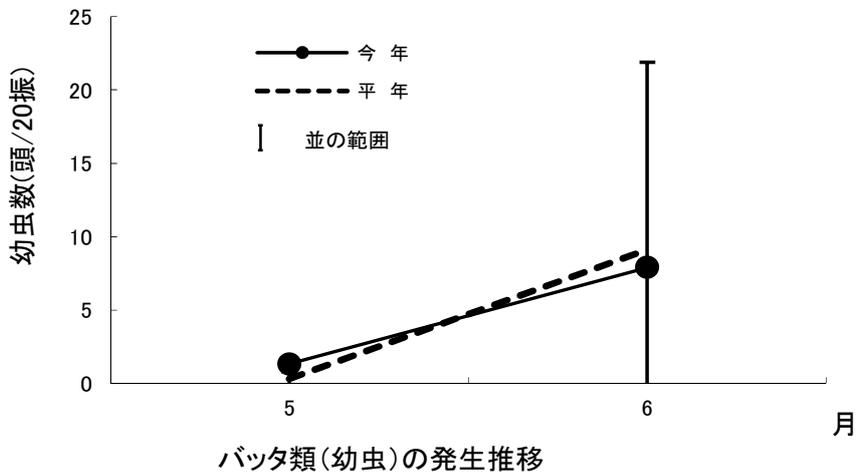
- ・ 宮城島の一部ほ場で多発生。

防除のポイント

- ・ 株出回数の多い場ほど発病株率も高くなる。
- ・ 胞子の飛散を防ぐため、できるだけ鞭状体出現前に袋がけして抜き取り処分する。
- ・ 発生ほ場やその隣接地から採苗しない。
- ・ 本病は雨水で移動して地上及び地下茎に感染するため、高培土で感染を予防する。
- ・ 多発生ほ場は更新するか抵抗性品種を利用する。

作物	さとうきび	地域	沖縄群島
病害虫名	② バッタ類		
6月の発生量(現況)	並		
7月の増減傾向	↗		
増減傾向の根拠	6月まで新生幼虫の発生が続くことから、6月より発生量は増加すると考えられる。		

発生量の根拠(調査結果)



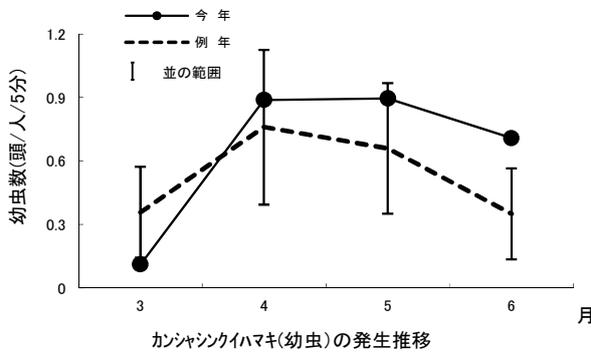
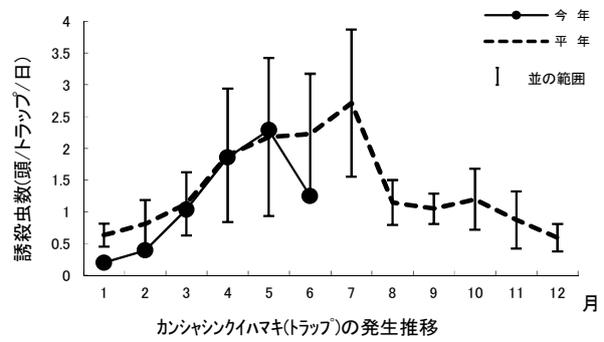
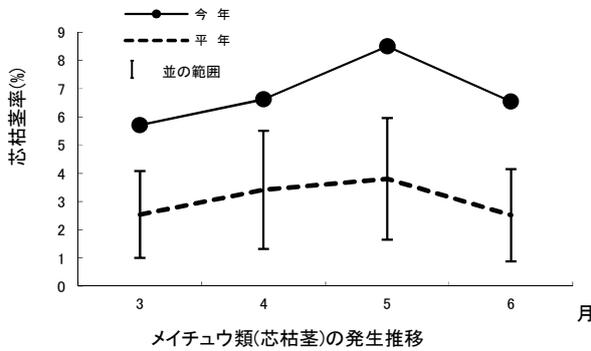
- ・ 防除員の報告によると、久米島で多発生。
- ・ 宮城島及び読谷村の一部ほ場でツチイナゴ属(幼虫)が多発生。
- ・ また、宮城島及び伊計島の一部ほ場でツチイナゴ属(成虫)が甚発生。

防除のポイント

- ・ イネ科雑草は幼虫の発生源であるため、ほ場及び周辺の除草を徹底する。
- ・ 幼虫期の防除が効果的なので、4~6月にほ場周辺の見回りを行い幼虫の早期発見・防除に努める。
- ・ 翌年の発生を抑制するため、収穫後(3~4月)に碎土を行い卵塊を破壊することが推奨される。

作物	さとうきび	地域	沖縄群島
病害虫名	③ メイチュウ類(カンシャシクイハマキ)		
6月の発生量(現況)	多		
7月の増減傾向	↗		
増減傾向の根拠	トラップ誘殺虫数の平年の発生推移から、6月より発生量は増加すると考えられる。		

発生量の根拠(調査結果)



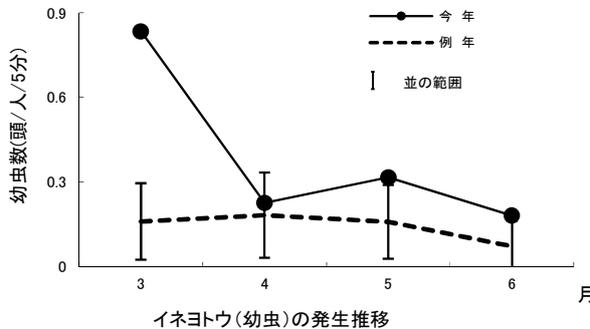
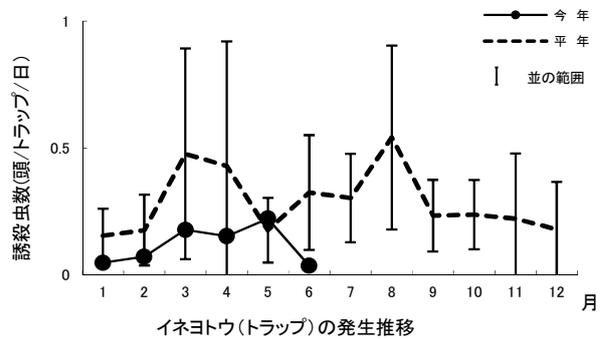
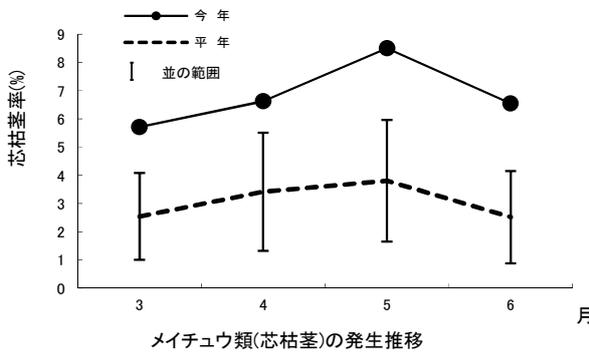
- ・ 芯枯茎切開調査の結果、確認された幼虫のうち80%が本種だった。
- ・ 防除員の報告によると、久米島で多発生。

防除のポイント

- ・ ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- ・ 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
- ・ ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- ・ 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間に散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- ・ 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。

作物	さとうきび	地域	沖縄群島
病害虫名	④ メイチュウ類(イネヨトウ)		
6月の発生量(現況)	多		
7月の増減傾向	→		
増減傾向の根拠	トラップ誘殺虫数の平年の発生推移から、6月と同程度の発生量と考えられる。		

発生量の根拠(調査結果)



- ・ 芯枯茎切開調査の結果、確認された幼虫のうち20%が本種だった。
- ・ 防除員の報告によると、久米島で多発生。一部ほ場では坪枯れも確認された。

防除のポイント

- ・ ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- ・ 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
- ・ ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- ・ 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間に散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- ・ 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。